叶わない恋

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
叶わない恋

【Ｎコード】
Ｎ３２４５Ｆ

【作者名】
ｐｅａｃｈ－ｐｉｔ

【あらすじ】
高２の乙葉は叶わない恋を約５年間している・・・。

1

私は笠原乙葉。

高校２年生。

私は約５年間、あなたに叶わない恋をしています。。。

「乙葉！起きろよ」

あなたが私の体を揺する。

「んー・・・」

私は重い目を開ける。

「今・・・何時い？」

私は寝ぼけながらあなたに尋ねる。

「今？７時３０分だけど・・・」

・・・７時・・・３０分・・・？

「うそッ？！」

私は体を起こす。

「ヤバい！！完璧遅刻だあ！！！！！！」

私はあなたを無視してベッドからおりる。

そしてクローゼットの扉を開けて制服を出す。

制服に着替えようとした時、あなたの存在に気づいた。

「ちょっと。今から着替えようとしている女の子の部屋にいつまでいる気？」

「なんだよその態度。せっかく起こしてやったのに礼もナシかよ」

そっちだって冷たいじゃない・・・。

「どーもありがとーございましたあ」

私の気持ちのこもってない礼を聞き、あなたは部屋を出て行った。

私は制服に着替え始める。

私の好きな人は、そう。

弟の高校1年生・剣です。

恋した理由は、

私達の両親はいつも喧嘩してて、毎日家の中は二人の大声で響いていた。

私達の「やめて」という声は二人には届かず、喧嘩はずっと続いていた。

私はいつも部屋で泣いていた。

ある日、剣が私の部屋に入ってきた。

「乙葉また泣いてンのかあ？」

「・・・うっさいわねー・・・」

私が下を向く。

すると、剣が私の頭に手をポンッと置いた。

私は驚いて剣を見る。

「乙葉は優しいな」

「・・・え？」

「だってあんな2人のために泣いてンだろ？乙葉は優しいよ」

そう言って剣は優しい笑顔を私に見せる。

私の心はゆれた。

初めて見た剣の笑顔は、とても優しくてかわいかった。
それから私は剣のことが気になり始めて好きになった。
剣が弟だって知ってる。
この恋が叶わない恋だって知ってる。
でもスキなんだよ。

・・・っとゆーわけで。

私は制服を着替え終わり、かばんを持って部屋を出た。
階段を早歩きでおりる。
洗面台に向い、歯ブラシを取り出す。
歯ブラシに歯磨き粉をつけ、歯を磨く。
時間がないので髪の毛も一緒に手入れする。
歯磨きと髪の手入れを終え、リビングに向う。
リビングに入ると私が座る席の机に朝食が置いてあった。
「はやく食えよ」

そう言って剣がキッチンから出てきた。

「これ・・・剣が作ったの？」

「おう」

「・・・ありがと」

私はそうつぶやいて席に座った。

2

私は剣の作ってくれた朝食をもくもくと口にほうばる。

剣は新聞を読みながら紅茶を飲んでいる。

そのせいかリビングはシーンとしている。

私はチラッと剣を見た。

なんか・・・カッコイイ・・・。

ふいんきってゆーかなんかカッコイイッ！

「・・・なに？」

「へ？！？！？！」

剣が私を睨む。

「さっきからこっち見てるケドなんか言いてーの？」

「いや。。。別に。。。」

私は俯く。

なんかさっきから剣冷たいなあ・・・。

「なあ、さっきからゆっくりしてっけど間に合うわけ？」

私は時計をチラッと見た。
時計の針は８：３０を過ぎていた。
私は思わず固まった。
「どした？」
「・・・もう完璧に遅刻・・・」
私は顔を青ざめた。
今まで学校遅刻したことないのに・・・。
ちょいショック。
剣が急に立ちあがったので私は顔をあげた。
「じゃあさ、サボンの手伝ってよ」
・・・へ？
「どこ行くかな～。やっぱ遊園地とかか？」
「子供っぽいかっ」
なんか・・・話勝手に進んでるンですけど・・・？
「ね、ねえ！話進めてるケドもしかして剣もサボる気？」

「え？そうだけど？」

剣は意外にもあっさりと答えた。

「だ、ダメだよッ。剣はまだ間に合うでしょ？」

「間にあわねーよ。だって乙葉と一緒の学校だし。それに俺、サボってばっかだからどーってことねーし」

そいや一緒の学校だっけ。

って関心してる場合じゃないッ！

「で、でも！」

「もーうっせえな！！」

剣は私の手を握った。

ドキッ。

私の胸は高鳴った。

「行くぞ！！！！」

「えっちょっ」

私は剣に引っ張られ、家を出た。

3

「・・・ねえ！」

私は剣につれて行かれて歩き続けている。

呼びかけたのに無理する剣。

ちょっとくらい返事してくれたっていいじゃない・・・。

どこ行くンだろ。

もしかして、さっき否定し続けたから怒ってるとか？

もしそうだったら謝らなきゃッ。

「剣、怒ってるンだったらゴメンねッ」

そう言った瞬間、剣が立ち止まった。

私も足を止める。

「・・・剣？」

「よしっ。ついたぞ」

「へ？」

私はあたりを見回した。

ココは・・・動物園だ。

「動物園？」

「そ。乙葉スキだろ？動物」

剣・・・覚えててくれたンだ・・・♪

「うん♪♪」

「じゃあ入るか」

剣はまた私の手を引っ張って歩き出した。

私はついて行くだけだった。

私達は動物園に入った。

「何からみる？」

剣はパンフレットを開いて私に尋ねる。

私はパンフレットを覗き込む。

「ンー・・・近くカラまわって見て行こうよッ！」

「分かった」

剣はパンフレットを閉じてジーパンのポケットに入れた。

「ン」

剣は右手を差し出す。

私はこの意味が分かった。

“手をつなぐ”という意味だと。

私は左手で剣の右手を握った。

私達は並んで歩きだした。

周りから見たら私達ってカップルだよね・・・？

でも実際は姉弟なんだよ。

こんなの・・・苦しいよ・・・。

「ペンギン見るか？」

優しく話しかけてくれる剣。

そんな優しさに涙が出てくる・・・。

「え。なんで泣いてんの？！」

急に泣きだした私に驚く剣。

急にビックリしたよね・・・。

ゴメンね・・・。

私は涙を指で拭う。

「なんでもないッ！ペンギン見よ？」

私はなにもないふりをして剣を引っ張った。

「お・・・おう」

私達はペンギンのいるところに着いた。

ペンギンはいっぱいいて、トコトコと可愛らしく歩いたり、泳いだりしていた。

そんなペンギンに私はとても好奇心をもった。

「かーわいい～♪」

私は頬をピンクに染めた。

「おめーのが可愛いけどな」

剣がボソッと何か言ったみたいだけど聞こえなかった。

「なんか言ったー？」

そう聞いた瞬間、剣の顔が赤くなった。

「なんでもねーし！」

ぷいっと私と反対を向く。

そんな行動がとても可愛くて・・・・。

「なになに？気になンじゃん！」

もっと愛おしくなっちゃう・・・・。

「なんでもねーっつーの！」

剣すごい顔真っ赤だよ・・・？

「ぷっ」

私はつい笑ってしまった。

「な、何笑ってんだよッ」

「ごめっ・・・つい・・・ぷぷっ」

笑いが・・・止まらないっ！

「ぷっ。ははっ」

剣も私につられて笑いだした。

私達は笑い合った。

「・・・乙、葉？」

この背後からの言葉に私達の笑いが止まった。

私は振り向いた。

そこには２・３０代の女の人が立っていた。

この人・・・誰？

てか、なんで私の名前知ってンの？！

私と剣は目をまるくして女性を見た。

「あら、やっぱ覚えてない・・・か」

女性は少し悲しい顔をした。

覚えてない？

どういう意味なの？

「私は・・・あなた達の母親なのよ」

4

【私はあなた達の母親なのよ】

母親・・・？

この人・・・が？

私はチラッと剣を見た。

剣はびっくりして固まっている。

昔、私達が物心をもった頃。

私達の両親はいないのが不思議に思った。

育ててくれたのはおばあちゃんとおじいちゃん。

幼稚園や学校などに来てくれるのもおばあちゃんとおじいちゃん。

トモダチはみんなお母さんやお父さんが来てくれてるのに・・・。

私はある日。

「どうして私にはママとパパがいないの？」

おばあちゃんにずっと思っていたことを聞いてみた。

おばあちゃんは少し黙り、口を開いた。

「乙葉チャンのパパとママは死んじゃったんだよ？」

死んだ・・・？

「どうして・・・？」

「パパは乙葉チャンを産んだ次の日に事故で、ママは乙葉チャンを産んでそのまま・・・」

そんな・・・っ。

幼い私には刺激が強すぎたのか私はその場に倒れてしまった・・・・。

その後のことはあまり覚えてない。

剣にも教えたような気がする。

でもまさか本当はお母さんがいたなんて・・・。

「どう・・・して？お母さんは死んだって・・・」

私の声はなぜか震えていた。

お母さんと逢えたから？

「それ、誰から聞いたの？」

お母さん（？）は真剣な瞳で私を見つめる。

「え・・・おばあちゃんから・・・」

「お母さん・・・乙葉のために嘘を・・・」

「う・・・そ？」

どういうこと・・・？

おばあちゃんが嘘ついてたってこと・・・？

「ホントはね私達はあなた達を捨てたのよ」

「「え？！？！」」

私と剣の声が重なった。

「乙葉を産んだとき私はまだ若くて遊びたい時期だった。私は軽い気持ちで乙葉を産んだ・・・。でもね産んだ瞬間気づいたの。【産むのにはまだ早い】って。それで産んだ後、お母さんの家の前に乙葉を置いたの」

そんな・・・。

「そんなのおめーの勝手じゃねーかッ！！！！！」

剣は怒鳴った。

一瞬ビクッとしたお母さん。

「まだ続き、あるのよ」

でもお母さんは剣を真剣な瞳で見つめた。

そんなをお母さんを見た剣は黙り込んだ。

「乙葉を捨ててから私はホストとかクラブとかで遊びまくったわ。もちろんＳＥＸも・・・。そのせいで今度は剣が出来てしまったの・・・」

ん？ちょっと待って。

「ということは・・・・」

「そう。あなた達は兄弟じゃないの」

「まぢかよ・・・」

剣はその場にしゃがみこんだ。

お母さんは剣に近づき、剣の前にしゃがみこむ。

「あなたのお父さんは誰か分からない。でもいちおは私の息子よ。だから少しは乙葉と血つながってるわ」

お母さんの手が剣の頭に触れようとした瞬間、剣がその手を振り払った。

「さわんじゃねーよ」

剣がお母さんを睨む。

「嫌われちゃったか・・・。無理もないわね。私は2人とも捨ててるンですもの」

お母さんは鼻でフッと笑う。

「ねえ、あなたが本当にお母さんなら聞くわ。・・・捨てたことに後悔はないの？」

「・・・乙葉を捨てたトキはしょうがないって思ってたわ。でも、剣を捨てようとお母さん家に行った時、窓にあんなに小さかったのに少し成長した乙葉が見えたの。・・・すごく愛おしくなったわ・・・」

「それなら剣だけでも育てればよかったじゃないッ！！！！」

私を愛おしく思って後悔したならそっから気持ちを切り替えて剣だけでも愛情をそそいでほしかった・・・。

「私もそう思ったわ。でも私にはそんな余裕なかったのよ」

お金がないってこと？

「ゆうふくじゃないと剣がかわいそうでしょ？だから・・・」

「ウソだろ」

今まで黙りこんでた剣が口を開いた。

「どうせ俺らのこと育てんのがめんどくせーだけだったんだろ」

なんか剣むちゃくちゃキレてるんですけど？

「ちょっと剣失礼だよッ！」

そんなわけ・・・！！！

「いいのよ。乙葉」

・・・え？

お母さんはまた剣のほうに振りむく。

「剣、あなたの言うとうりよ」

「「・・・え？」」

また私と剣の声が重なる。

「その気持ちは少しあったわ。でもね、いちおは自分の子供っていう自覚があるから育てなきゃとは思ってたのよ？」

「じゃあ育てろよ。俺はどーでもいい。でも乙葉は女だぞ？かわいそうとはおもわねーのか？」

剣・・・。

私のことそんなふうに・・・。

「ふふっ。あなた達、愛し合ってるのね」

お母さんは嬉しそうに笑った。

私は顔を赤らめる。

「でもすごい度胸ね。兄弟じゃないって自覚ないのに愛し合ってるなんて」

「兄弟とか関係ねーじゃん。気持ちの問題だし」

剣・・・。

「ふふっ。そうね。その考えは正しいわ。でもね、現実はそうあまくないわよ」

さっきまで緩んでいたお母さんの表情がまた厳しくなる。

「そんなことわかってるし」

睨みあう剣とお母さん。

「そ。ならいいわ」

にっこり笑うお母さん。

「早百合〜！」

遠くカラ人を探してる人の声が聞こえた。

「あら、私のこと探してるわ☆じゃあまた逢いましょ？」

お母さんは私達に手を振って人混みの中に吸い込まれていった。

「なんだアイツ。ホントに母親かよ」

剣はイラついてるのか舌打ちをする。

「でも、お母さんのあの性格ちょっと剣に似てるかも？」

「はー？！まぢかよー最悪」

私は笑いが込み上げてきた。

「てめ何笑ってンだよッ」

剣が私の頬をつねる。

「いふぁいふぁいッ（いたいいたい）！！！！」

「ごふぇんなふぁーい（ごめんなさーい）！！！！」

剣はつめるのをやめてくれた。

いたかったー・・・。

そう思っていたら今度は優しく剣の手が私の頬に触れた。

「つる・・・」

剣は私の言葉を無視して私にキスをした。

甘くてとろけそうなキス・・・。

剣は唇を離した。

「乙葉。好きだ」

5

ありえない・・・。

剣から私に対しての“好き”って言葉を聞けるなんて・・・。

「乙葉？」

はっ。

剣の声で我にかえった。

「返事は？」

返事って・・・告白の？！

私は顔を赤く染める。

「でも・・・私達兄弟だし・・・」

「さっき兄弟じゃねーって言ってたじゃん」

たしかに・・・。

「でも戸籍上は・・・」「乙葉」

私の言葉を消した剣の真剣な言葉。

「自分の気持ちに素直になれよ」

私は剣の顔を見た。
剣の瞳は真剣だった。
・・・剣の言う通り。
私自分の気持ちごまかしてた。
・・・でも・・・。
「私は・・・」
私達の関係は・・・。
「剣のコト・・・」
いけないことなんだよ・・・。
「・・・好きじゃない」
たとえ実際は兄弟じゃなくても。
戸籍上は兄弟。
私達の関係を誰も信じるわけがない。
怖いンだ・・・離れ離れになるのが。
私の瞳からぽろぽろと涙があふれ出る。

「嘘だろ？」

「ホントだよッ」

私は頑張ってあふれ出る涙をこらえる。

でもどうしても溢れてしまう・・・。

「・・・じゃあなんで泣いてンだよ？」

“ホントゎスキだから”

なんて言えないよ・・・。

私は黙って走り出した。

ゴメンね・・・・・。

こんな弱いお姉ちゃんで・・・。

しばらく走ってようやく家についた。

私はドアを開ける。

玄関に足を踏み入れる。

妙に玄関ゎしーんとしていた。

なんか怖くなってきた・・・。

そりゃ今は誰もいないケドさ～。

私はリビングに入り、ソファーにカバンを置く。

そしてリモコンを手に取り、テレビの電源スイッチを押す。

初めに映ったのは不動産系のＣＭ。

昔は剣と一緒に暮らすなんて思ってなかったな・・・。

もし、剣に彼女が出来たら・・・。

私はこの家を出て・・・。

私は近くにあったクッションに顔をうめる。

はあ・・・。

何回でも出てくるため息。

明日・・・不動産屋さん行ってこよかな・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3245f/

叶わない恋

2010年11月26日06時46分発行